

「美しいほとけと仏教工芸」展によせて

『常暁請来目録』と「道具」の請来について

常暁(?-866)は平安時代前期に中国に渡った僧侶で、最澄や空海、円仁らとともに入唐八家の1人として数えられます。彼らは中国で密教を伝授され、經典や曼荼羅、密教法具などを請来し、新しい教えを日本にもたらしました。

常暁が帰国後の承和六年に上表した『常暁請来目録』(図1 重要文化財、平安時代の写し、大和文華館)によると、常暁は承和三年(836)五月に留学僧を拝命しますが、その年は出航したものの漂流して戻り、翌837年も渡海できず、承和五年(838)六月に太宰府を出発し、その年の八月ようやく入唐を果たしています。この時、常暁は遣唐使に従っていたものの、唐から入京と在留を許されたのは同行していた円仁・円行・円載らのうち円行と円載でした。円仁は遣唐使に従う途中で下船して在留を強行していますが、常暁はわずか一年ほどで帰朝せざるを得ませんでした。

しかし、その滞在期間に常暁は積極的に教えを請い、栖霞寺灌頂阿闍梨文璨と華林寺三教講論大徳元照を師とし

て「金剛海瑜伽」や「大元[師]秘法」を学び、阿闍梨位を受けています。特に文璨から伝授された大元帥法は常暁が日本に請来したのち、鎮護国家の修法として朝廷で長く行われました。

『常暁請来目録』はこれまでに指摘されているように、巻頭の文章が空海の請来目録になぞらえられています。空海は延暦二十三年(804)に入唐し、二年ほどの滞在で多くの成果をあげて大同元年(806)に帰朝しており、常暁は求法の旅が短期間に終わった自らの事績を高めたいという意図もあったのではないのでしょうか。

『弘法大師請来目録』(国宝 最澄筆 京都・教王護国寺〔東寺〕)に記される空海の請来品は、經典や曼荼羅などの他に「道具」として密教法具が九種十八口、「阿闍梨付囑物」として仏舍利や刻白檀物菩薩金剛等像など八種が記され、伝法の証として師の恵より授けられたことがわかります。空海の請来品と伝わる密教法具は教王護国寺や和歌山・金剛峯寺などに伝えられ、録

外請来品もあった可能性が指摘されています。

また目録の末尾には「和尚告曰、真言秘藏経疏隱密不假図画、不能相伝。則喚供奉丹青・李真等十余人、図絵胎藏金剛界等大曼荼羅等十一鋪、僉集廿余経生、書写金剛頂等最上乘密藏経。又喚供奉鑄博士楊忠信・趙興、新造道具一十五事。図像写経漸有次第」とあり、真言秘藏を相伝するには、經典のみならず図画が必要であり、曼荼羅などの図画や道具を新たに造らせて請来したと記されます。

『常暁請来目録』では、空海よりも点数は少ないものの、経疏や仏像(あるいは仏画)、曼荼羅など、また「伝法阿闍梨耶付物」として道具十種が記載されています(図2)。

「伝法阿闍梨耶付物

- 五鈷金剛杵一
- 三鈷金剛杵一
- 銅鈹一具
- 銅鏡一口
- 金剛樹子念珠一貫
- 多羅梵夾一口
- 金剛海三十七尊種子曼荼羅一
- 君茶壇様十七種 一有之
- 西天檀褥一面
- 西天供養白疊巾一条

傳法阿闍梨授弟子灌頂法二卷」

これらは栖霞寺灌頂阿闍梨文璨の所に伝えられていたものであり、密教法具および梵音具、経巻など、檀を整え、修法を行う道具類です。常暁は新たに密教法具を造ったとは記されていませんが、目録の末尾には「則喚即供奉李全等、図絵大元帥将部曼荼羅等諸尊像并写文書。漸有次第」とあり、目録の「大元帥本身将部曼荼羅一鋪 惣五十余身」(図3)に当たると考えられます。空海と同様に、本尊を新しく描かせているのであり、常暁が入唐による成果として新たに請来する修法に、大元帥法を重要視していたことがうかがえます。

大元帥法は明治維新以降途絶えますが、今年再び、醍醐寺において修されており、入唐僧常暁の名を現在まで伝えていきます。

『常暁請来目録』に記載される密教法具は「伝法阿闍梨耶付物」に見られるのみですが、本目録には「両部別録」(図4・5)が付属して伝来し、録外請来品目録との見方があります。その中には五鈷杵や三鈷杵、独鈷鈴、鏡、螺などさらに多くの種類が含まれており、これらの内容も慎重に検討していく必要があります。(瀧朝子)

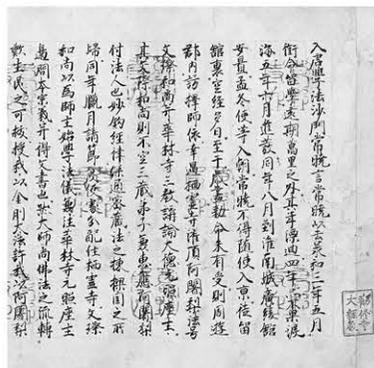


図1 『常暁請来目録』(巻頭部分)

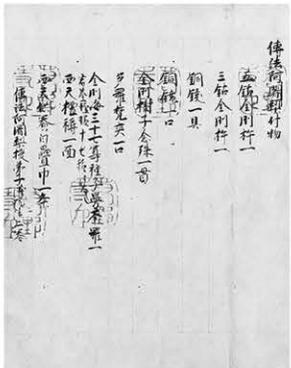


図2 『常暁請来目録』(部分)



図3 「両部別録」(巻頭部分)



図4 「両部別録」(部分)

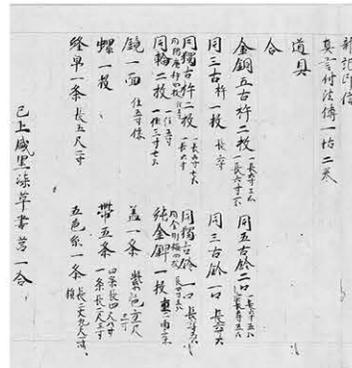


図5